

「主体的に学ぶ」とは？ —自己決定型学習について—

仁愛女子短期大学 講師 増田 翼

◆講座要項掲載内容◆

自ら学び、自ら問いを発見し、自ら解決に向けて行動できる力（自己決定型学習力）を身につけることは、それほど簡単ではありません。なぜなら、受身型の学習環境に慣れている私たちにとって、学習のすべてを自分でデザインするというのは苦痛を伴うものだからです。では、この苦痛を取り除くにはどうしたらよいのでしょうか。「ほとんど本を読まない」「必要なことしか勉強しない」という学習スタイルを少しでも変えたいという方、あるいは職員の主体的な学びをサポートしたいという方、ぜひご参加ください。

◆開催期日◆

平成 23 年 11 月 26 日（土）13:30 ~ 15:00

◆開催内容◆

1. はじめに

「働きながら学び、学びながら働く」。社会人として仕事をしていくうえで、このことは当然のことのように求められます。もちろん、保育者も同様です。

しかし、こうしたことを私たちは〈学校〉で教わってきたのでしょうか。日本の学校システムにおいては、小・中・高、そして大学・短大・専門学校とどこを覗

いても、受容型の学習環境が中心となっています。それはつまり、いつも先生が前で喋って、学習者は机に向かって必死に黒板を写す、先生の顔を窺いながら正解をなんとなく察していく、といった学習環境です。私たちは、こうした受容型の学習スタイルを小さいころから経験してきているため、いざ社会に出て〈先生〉という存在がいなくなると、学習に際して相当の苦痛が伴うようになります。「どうして誰も答えを教えてくれないんだ!」「何が大切なのか、重要なのか分からないじゃないか!」「どこに行けば、必要な情報が手に入るんだ?」「何でわざわざ他人と協力して答探しをしなくちゃいけないんだ!」……。そうです、今まではすべて〈先生〉が周到に用意してくれていたのです。それをすべて自分がしなくてはいけない—学習の計画・準備・調査、そして学習のまとめ、さらには学習の評価まで—というのは、容易なことではないのです。

様々な IT 技術の革新によって、日々更新される情報にさらされている私たちにとって、これまでのように「学ぶ時期」→「働く時期」→「余暇（引退）の時期」という人生設計は馴染まなくなってきました。変化の激しい現代社会においては、常にスキルアップを図り、生活をその都度立て直していく必要があるのです。だからこそ、これまで以上に、「学び方」を学ぶことが重要だ、といわれているのです。

さて、今回のワークショップでは、「働きながら学び、学びながら働く」とはどういうことなのか、さらに具体的には、学校システムでの「学び」と仕事のなかでの「学び」とは何が違うのか、こうした点に注目しながら、「自己決定型学習」について考えを深めていきたいと思います。



2. 二種類の学習スタイル（受容型と自己決定型）

今触れたように、現在の日本の学校における学習環境は、とかく教師中心にデザインされていることがほとんどです。このような学習スタイルを、ここでは「受容型学習」と呼ぶことにします。一方で、〈自ら学び、自ら問いを発見し、自ら解決に向けて行動する〉という学習のかたちを、ここでは「自己決定型学習」と呼ぶことにします。まずは、この二つの学習スタイルの違いを簡単に見ておきましょう。

受容型学習		自己決定型学習
教師が設定 教師が評価	課題や目標 学習成果	自分で設定 自分で評価
点数	学習成果の 基準	記述
基礎的知識 を覚える	学習方法	課題を解決 する
ティーチャー	教師の役割	ファシリテーター

上表の通り、二つの学習スタイルの一番の大きな違いは、誰が学習をデザインするのか、という点にあります。受容型学習とは異なり、自己決定型学習においては、学習に関わるすべてのことを「自分」でデザインしていかねばなりません。また、自己決定型学習の方法は、受容型のように知識を覚えることが主ではなく、自分に迫ってきている課題を解決するということが中心になります。

学校システムのなかでは、クラスにいる人間にみな同じ問題が提示され、答えも一つ、ということが大半です。しかし、社会を生きていくうえでは、一人ひとりの課題はまったく別なものです。自分に課せられた問いは、最終的には自分で解決するしかありません。したがって、〈何を学習すべきか〉という目標や、〈学習内容が果たして適切だったのか〉という評価を他人に求めるべきではないのです。

3. 受容型学習から自己決定型学習への転換

さて、何度も述べているように、社会人として求められるのは、「働きながら学び、学びながら働く」ということです。そのためには、学校システムの大半を占めていた〈受容型学習〉から、〈自己決定型学習〉へと自分の学習スタイルを転換する必要があります。つまり、さきほどの表でいえば、それぞれの項目について、左側から右側へと、自分の学習スタイルを転換していかなければなりません。

けれども、ここに一つ落とし穴が存在します。それは、この転換を図ろうとすれば、相当な苦勞がつきまとう、ということです。なるほど、今日からでも〈自己決定型学習〉に移行すれば良いのか、と考えたところで、この転換はそれほど容易くはないのです。実際は、転換に際して非常に苦痛が伴い、多くの人はここから逃れようと様々な反応を示します。たとえば、冒頭でも触れたように、導き手が不在であることへの怒り、他人と協働することへの抵抗感、言葉で表現することへの倦怠感、自己決定の基準・手法が見えない不安、知識が行動実践へ生かせない苛立ち、などが起こります。

「なぜ、若い保育者は本を読まないのか?」「なぜ、自分の意見を堂々ともてないのか?」。こういったことは、急に社会に放り出されて、それでも必死に自分の学習スタイルを転換しなくてはいけないことに気づき出した時期に、よく見られる姿です。本当は、この時期を乗り越えて、「自分から」という学習スタイルを身につけるべきなのですが、それが何らか上手くいかず悪循環に陥ると、周囲からの評価も下がり、余計に学習に対する意欲が低下していきます。〈主体的に〉という内側からの原動力が適切に自分の仕事や学習に生かせるためには、〈自己決定型学習〉を身につけておくことが何よりも不可欠なのです。

ところで、学習スタイルを転換するに当たって、私たちは具体的にどのようなプロセスを踏むのでしょうか。ワークショップ当日には詳細をまとめた資料を配布しました。ここでは、そのすべてを載せることはで

きないので、簡単に概略のみ提示します。そのプロセスとは、順に進むと、〈受容型学習〉→①周囲と自分との不一致・とまどい・混乱→②状況の見極めと引きこもり→③自分なりの探求→④環境が変化してからこれまでの振り返り→⑤ほかの人への関心→⑥新たな興味と熱意→⑦新たな方向づけ→⑧発見の分かち合い→⑨精神的安定→〈自己決定型学習〉と進んでいきます。もちろんこのプロセスには個人差があり、人によっては一つひとつの順路を飛び越えてすぐに自己決定的になる人もいますし、こうしたプロセスをぐるぐると廻り続けなかなか自己決定的になれない人もいます。しかし、いずれにせよ重要なのは、私たちは、このような長いプロセスを経て、ようやく自己決定型の〈学び方〉を修得していくという点です。

4. 自己決定型学習をファシリテート（促進） するとは？

それではこうした〈受容型〉から〈自己決定型〉へのプロセスの最中にある者に対して、周囲の人間はどのようなサポートをすべきなのでしょう。当日のワークショップでは、以下に載せるような重要な点をいくつか確認しました。

- ・おとなは皆、自己決定的に学習できると考えるのは間違いであること。
- ・しかし、一人ひとりには多かれ少なかれ自己決定型学習に取りかかる能力はあること。
- ・したがって、ファシリテート役の人間（促進者）には、

学習者が徐々に自己決定的になれるように適切にサポートしていくことが求められる。

当然、同じ職場で働く者同士に、なぜ援助の姿勢を見せなくてはならないのか、と考えてしまうのも無理はありません。けれども、こうしたことへの理解が、結果的には一人ひとりの学習を主体的なものに変え、よりよい学習環境づくりへとつながっていくことは確実なのです。

5. さいごに

本来ならば、社会に出る前に、学校システムのなかでこうしたことを鍛えるべきなのかもしれません。実際に、こうしたことは盛んに議論されていますし、つい最近までよく耳にした〈ゆとり教育〉というのも、根本的には、問題解決学習（自己決定型学習）を重視しようとした教育政策の一つでした。大学・短大のような高等教育機関でも、現在は様々な取り組みがされ、〈自ら学び、自ら問いを発見し、自ら解決に向けて行動する〉という学習スタイルの修得が意識的に目指されています。あまりにも目まぐるしく変化していく社会だからこそ、こうした〈学び方〉の学習は今まで以上に重視されていくのかもしれません。

当日のワークショップでは、以上のような内容について考えを深めた後に、参加者同士の意見交流を行いました。今回のテーマについて、それぞれの立場から様々なご意見を述べていただき、たいへん有意義な時間となりました。

【参考文献】

パトリシア・A・クラントン、入江直子ほか訳『おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして』鳳書房、2002年

